

平成 22年 6月 14日現在

研究種目：基盤研究（B）  
 研究期間：2007～2009  
 課題番号：19330042  
 研究課題名（和文）マルクス抜粋ノートの編集とその活用による『資本論』  
 形成史研究の新段階の開拓  
 研究課題名（英文）A new stage in researches on the history of formation of the *Capital*  
 by Karl Marx through the edition of and the use of his unpublished  
 Quotation Notebooks  
 研究代表者  
 平子 友長（TAIRAKO TOMONAGA）  
 一橋大学・大学院社会学研究科・教授  
 研究者番号：50126364

研究成果の概要（和文）：本研究は、マルクスの抜粋ノートを活用した世界で初めての本格的なマルクス研究である。これによって、(1)『資本論』第1巻成立過程において「草稿」と「抜粋ノート」がどのように利用されたのかが初めて詳細に解明された。(2)マルクスの農芸化学、地質学、鉱物学に関する抜粋ノートを検討し、それを同時代の自然科学史の中に位置づけた。(3)『資本論』第1版刊行直後から開始される古ゲルマン史研究者マウラーの抜粋ノートを検討し、それがマルクス最晩年の世界史把握の形成に決定的役割を果たしたことを文献的に証明した。本研究は、ドイツ語版マルクス・エンゲルス全集の編集に日本人研究者が参加するという意味でも、その国際的意義はきわめて大きい。

研究成果の概要（英文）：After three years international cooperative researches (from April 2007 to March 2009), our research group published, for the first time in the world, comprehensive collective researches into the Quotation Notebooks by Marx which are to be included in the Vols. 17, 18, 19 of the New German Edition of *Marx-Engels-Gesamtausgabe*. The following new discoveries are accomplished: (1) The respective roles of Manuscripts and Quotation Notebooks in the 1860s for the formation of the first volume of the *Capital* by Marx. (2) The content of Quotation Notebooks by Marx about agricultural chemistry, geology, mineralogy and other natural sciences, and their significance in the history of natural sciences in the 19<sup>th</sup> century. (3) Marx' studies on G. L. von Maurer which began in March 1868. Maurer urged Marx to critically revise his perspective about the world history, whose final form was found in the manuscripts of the letter by Marx addressed to Vera Zassoulitch (February 1881).

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	5,400,000	1,620,000	7,020,000
2008年度	3,000,000	900,000	3,900,000
2009年度	4,100,000	1,230,000	5,330,000
年度			
総計	12,500,000	3,750,000	16,250,000

研究分野：経済理論

科研費の分科・細目：経済学、経済学説・経済思想

キーワード：マルクス、エンゲルス、資本論、経済学批判、Marx-Engels-Gesamtausgabe、  
 Georg Ludwig von Maurer、Hermann Maron、Franz Xaver von Hlubeck

## 1. 研究開始当初の背景

1990年以後、Marx-Engels-Gesamtausgabe (全123巻、1975年～、既刊全58巻、以下「新メガ」と略記)の編集・刊行は国際マルクス=エンゲルス財団(以下IMESと略記)が担うことになった。1998年以後、日本人研究者が日本メガ編集委員会として編集に参画するようになった。2005年11月、その最初の成果が『資本論』第2部エンゲルス編集原稿を収録する新メガII/12巻として出版された。大谷禎之介(研究分担者)、リュドミーラ・ヴァーシナ(海外研究協力者)の共同編集になるII/11巻の編集も最終局面を迎えていた(2008年刊行)。同年II/13巻(『資本論』第2部)も刊行され、II/4.3巻(1863～67年の第2部および第3部のための草稿・準備稿)を残すだけとなった(2010年刊行予定)。第2部門の完結にともなって新メガ編集の力点は、歴史上初めて公開される第4部門(マルクス、エンゲルスの抜粋ノート)に置かれるようになった。抜粋ノートの刊行によって、著作・草稿・書簡・抜粋ノート四者の比較対照を通してマルクス経済学の形成・発展の過程を探求するという、マルクス研究史上全く新たな研究分野が開かれた。日本メガ編集委員会は、IV/17巻(1863年5月～6月のマルクスの抜粋ノート)、IV/18巻(1864年2月～1868年9月のマルクス・エンゲルスの抜粋ノート)、IV/19巻(1868年9月～1869年9月のマルクスの抜粋ノート)の編集をIMESより委嘱された。

## 2. 研究の目的

- (1) IV/18巻それ自体の刊行に向けた編集作業を行う。
- (2) IV/17, IV/18, IV/19巻に収録されるマルクスの抜粋ノートを活用して著作・草稿・書簡・抜粋ノート四者の比較対照を通して、『資本論』成立史研究の新しい研究水準を切り開く。
- (3) マルクスの抜粋ノートを活用して、『資本論』第1巻第1版(1867)刊行以降のマルクスの世界史把握の変遷の内容とその意味を探求する。

## 3. 研究の方法

- (1) 【オリジナル資料の収集】2007年10月社会史国際研究所(アムステルダム)を訪問し、IV/17, IV/18, IV/19巻に収録される全抜粋ノートの撮影を行った。同時並行的に抜粋されている文献のオリジナルを抜粋されていない頁も含め全体をコピーないしPDFで収集した。
- (2) 【IV/18巻の編集】1920～30年代にモスクワで行われた解説原稿(一部未解説)を参照しつつ、社会史国際研究所で収録したオリジナル画像からテキストの解説・入力を行った。同時に

抜粋文と原文献との相違を記録した。

## (3) 【『資本論』成立史研究の新天地の開拓】

①『資本論』第1巻の成立過程における『草稿』と『抜粋ノート』の役割分担、それぞれの機能を解明した。②大谷禎之介(研究分担者)、リュドミーラ・ヴァーシナ(海外研究協力者)はII/11巻(『資本論』第2部の第2稿および第5～8稿)の編集を継続し2008年に刊行した。同時並行的に『資本論』第2巻草稿と抜粋ノートとの関係を探求した。③『資本論』第3巻の形成に果たした抜粋ノートの役割を検討した。

(4) 【『資本論』後の後期マルクス研究の新天地の開拓】1968年以降のマルクスの抜粋ノートには『資本論』全3巻に必要な文献の抜粋には留まらない新しいマルクス(後期マルクス)の誕生を示唆する抜粋ノートが少なからずある。後期マルクスの性格を以下の2方向から探求した。①1868年3月から始まるマルクスのマウラー(古ゲルマン史研究者)研究の内容とその意義を解明した。②フルベク、マロン、リービヒ、フラスなどのマルクスの農芸化学、地質学、鉱物学に関する抜粋ノートを検討し、それを同時代の自然科学史の中に位置づけた。

(4) 上記の研究目的、研究方法を実現するために各年度1～2回新メガ抜粋ノートに関する国際会議を開催した。

## 4. 研究成果

(1) 【研究目的(1)に関して】IV/18巻それ自体の刊行に向けた編集作業は、IMESおよびベルリン・ブランデンブルク科学アカデミーとの密接な連携の下に行われた。社会史国際研究所で収録したオリジナル画像の解説作業は、「研究方法」(1)(2)で示した手順に従って行い、テキスト部分の約9割まで到達した。2010年度中にこれを完了し「研究付属資料Apparat」の作成に取り組む。

## (2) 【研究目的(2)(3)に関して】

2007年度～2009年度における研究成果を『マルクス抜粋ノートの編集とその活用による『資本論』形成史研究の新段階の開拓 Erschließung eines neuen Stadiums im Studium der Entstehungsgeschichte des „Kapitals“ von Karl Marx durch die Edition und Benutzung seiner Exzerpthefte』(研究代表者 平子友長)(一橋大学生協、2010年3月31日、pp. 1-407)として刊行した。本書は、マルクスの抜粋ノートを活用した世界で初めての研究としてすでに世界のマルクス研究者の注目を集めており、本書の英語版の出版企画が現在進行中である。その「目次」(日本語・ドイツ語)は以下の通りである。

研究の概要 (研究代表者: 平子友長)

第 I 部 マルクスの抜粋ノートの意義と MEGA  
 第 IV 部門でのその編集  
 第 1 章 MEGA 第 IV 部門での抜粋ノートの編集に寄せて (リヒャルト・シュパール) (ドイツ語)  
 第 2 章 新たな理論の出現—1844年から始まる諸ノートに見るマルクスのノートの重要性— (ユルゲン・ローヤーン)  
 第 3 章 MEGA 第 IV 部門第 18 巻の編集作業について (佐々木隆治)

第 II 部 マルクスと同時代の経済学者たち  
 第 4 章 ブラ、リカードウ、マルクス (出雲雅志)  
 第 5 章 デューリングとマルクス (内田博)  
 第 6 章 マルクスの資本論草稿におけるマクラウドからの抜粋文の検討—マクラウドと新古典派経済学との関連を中心に— (高畑明尚)

第 III 部 『資本論』草稿とマルクスの抜粋ノート  
 第 7 章 マルクスが使った *monied capital* という語の上流に遡る (大谷禎之介)  
 第 8 章 『資本論』第 2 部第 2 稿と第 8 稿の再生産論 (伊藤 武)  
 第 9 章 1860 年代中葉におけるマルクスの地代論研究—同時期の抜粋ノート、61-63 年草稿、『資本論』第 3 部第 6 篇の対比による解明— (竹永 進)  
 第 10 章 『資本論』体系における価値理論の展開と「労賃」「生産価格」「地代」—1860 年代マルクスの理論形成連鎖と構想転換連鎖を中心として— (鳥居伸好)  
 第 11 章 マルクス 1861-63 年草稿ノート第 XX-XXIII 冊「追補」の分析—「厚いノート *Dickes Heft*」および「サブノート *Beihefte*」との関連において— (森下宏美)

第 IV 部 マルクスの抜粋ノートに見るマルクスの共同体研究  
 第 12 章 マウラーの〈マルク共同体〉研究とマルクス (浅川雅己)  
 第 13 章 マルクスのマウラー研究の射程—後期マルクスの始まり— (平子友長)

第 V 部 農学および自然諸科学にかんするマルクスの抜粋ノート  
 第 14 章 マルクスの地質学・鉱物学・農芸化学にかんする抜粋と彼の化学諸草稿との対比—それらの抜粋を科学史のなかに位置づける— (アンネリーゼ・グリーゼ) (ドイツ語)  
 第 15 章 カール・マルクスによるフルーベク『農学大観』(1853 年) からの抜粋 (ロルフ・ヘッカー) (ドイツ語)

第 VI 部 マルクスと日本  
 第 16 章 知的結合のトライアングル—中

国・朝鮮・日本における古典派経済学とマルクス経済学— (赤間道夫)

第 17 章 マルクスの「日本研究」について—ヘルマン・マロンからの「抜粋」の紹介— (天野光則)

第 18 章 ヘルマン・マロンの伝記的事実—プロイセンの日本調査団中の農業専門家— (ロルフ・ヘッカー) (ドイツ語)  
 付録 MEGA 第 IV 部門第 18 巻目次 (ドイツ語)

「研究目的(2)」「研究方法(3)①」に関しては、第 11 章 (森下) が重要である。森下は、『資本論』第 1 巻における 345 の引用文について『資本論』第 1 巻第 1 巻、『1861-1863 年草稿ノート XX-XIII』、IV/17 巻に掲載予定の『サブノート *Beiheft A~H*』を悉皆比較し、マルクスにおける『草稿』と『抜粋ノート』の役割分担、それぞれの機能を解明した (世界で初めての研究)。「研究目的(2)」「研究目的(3)②」に関しては、大谷、ヴァーシナ編集による II/11 巻 (全 1850 頁) の刊行自体が大きな研究成果である。これに関する研究として第 III 部に属する諸論文がある。特に、第 8 章 (伊藤) は『資本論』第 1 巻刊行後のマルクスによる第 2 巻準備草稿の内容と意義について詳細に検討している。「研究目的(2)」「研究目的(3)③」に関しては、第 7 章 (大谷)、第 10 章 (鳥居) が論じている。

「研究目的(3)」「研究方法(4)①」に関しては第 IV 部掲載の 2 論文がある。特に第 13 章 (平子) は、1868 年 3 月から始まるマルクスのマウラー研究が 1881 年 2 月に書かれる「ザスーリッチへの手紙草稿」における新しい世界史把握の端緒をなしており、『資本論』第 1 巻における私的所有の「否定の否定」としての「個人的所有の再建」とは異なる未来社会像の探求がマウラー研究から始まることを、世界で初めて提示した。

「研究目的(3)」「研究方法(4)②」に関しては、マルクスが 1860 年代半ばから本格的に農芸化学、地質学、鉱物学の研究 (リービヒ、フルーベク、フラス、マロンなど) を開始したことを解明した。第 9 章 (竹永) は、マルクスの農芸化学研究が『資本論』第 3 巻の「地代」篇を準備する過程で生まれたことを解明した。第 15 章 (ヘッカー) は、マルクスの農芸化学研究が自然環境を破壊する資本主義的農業への批判からエコロジカルな農業の探求へと発展したこと、第 17 章 (天野)、第 18 章 (ヘッカー) は、エコロジカルで循環的農業への関心が人糞を肥料として利用していた江戸時代の日本の農業に対する研究へと発展していったことを解明した。第 14 章 (グリーゼ) は、1860 年代以降のマルクスの農芸化学、鉱物学、地質学に関わるすべての抜粋ノートの内容と意義を同時代

の自然科学史の中で解明した画期的な論文である。

「研究方法(4)」に関しては、①研究代表者平子が2008年3月、2009年3月、2010年3月海外研究協力者を招聘し「MEGA編集者国際会議」を開催した。②研究分担者の出雲が中心となって神奈川大学経済貿易研究所主催「国際シンポジウム〈マルクスの遺産〉」(2008年12月5～6日)を開催し、平子、赤間、大谷、窪、竹永、出雲、ヘッカーが研究成果を発表した。③2007年10月パリで開催された「パリ国際マルクス会議」に参加し、大谷、竹永、平子が研究報告を行った。④ヘッカー(海外研究協力者)は、ベルリンで国際会議「新MEGAによるマルクスの新読解」(2009年11月27～29日)を主催した。この国際会議では平子、ヘッカー、ヘレス(海外研究協力者)が研究成果を発表した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 38件)

- (1) 竹永 進, 「新MEGA第IV部門第19巻とその日本での編集作業について」, 大東文化大学『経済論集』第94号, 2010年, pp. 145-176, 査読無し
- (2) 伊藤 武, 「[研究ノート] 『資本論』第2部第2稿の再生産論」, 大阪経大会『大阪経大論集』第60巻第5号, 2010年, pp. 253-276, 査読無し
- (3) 平子友長, 「MEGA第1部門第5巻付録『ドイツ・イデオロギー』CD-ROM版の編集」, マルクス・エンゲルス研究者の会『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第51号, 八朔社, 2009年, pp. 79-98, 査読無し
- (4) 伊藤 武, 「『資本論』第2部第2稿と第8稿の再生産論」, 大阪経大会『大阪経大論集』第60巻第2号, 2009年, pp. 125-136, 査読無し
- (5) 大谷禎之介, 「『資本論』第2部仕上げのための苦闘の軌跡(下)」, 『経済』第164号, 新日本出版社, 2009年, pp. 169-191, 査読無し
- (6) 大谷禎之介, 「『資本論』第2部仕上げのための苦闘の軌跡(中)」, 『経済』第163号, 新日本出版社, 2009年, pp. 119-135, 査読無し
- (7) 大谷禎之介, 「『資本論』第2部仕上げのための苦闘の軌跡(上)」, 『経済』第162号, 新日本出版社, 2009年, pp. 141-157, 査読無し
- (8) 平子友長, Die Grundfehler der Hiromatsu-Edition der Deutschen Ideologie. *Hitotsubashi Journal of Social Studies*, Vol. 40-1, Hitotsubashi

University, Tokyo, 2008, pp. 59-72, 査読無し

- (9) 伊藤 武, 「『資本論』第2部第1稿の再生産論—MEGA研究[2]—」大阪経大会『大阪経大論集』第58巻第7号, 2008年, pp. 203-222, 査読無し
- (10) 伊藤 武, 「『資本論』第2部第1稿の資本循環論—MEGA研究[1]—」, 大阪経大会『大阪経大論集』第58巻第5号, 2007年, pp. 205-222, 査読無し

[学会発表] (計 55件)

- (1) 竹永 進, 《Theory of ground rent of Marx in the mid-1860's—a comparative study of the manuscripts of 1861 to 1863, of the Part 6 on ground rent of the Book 3 of Capital, and of the excerpt notebooks of the same period》, the 14<sup>th</sup> Annual Conference of the European Society of the History of Economic Thought, Amsterdam, 2010年3月26日
- (2) 平子友長, Neue Wende der Forschungen von Marx nach 1868—die Charakteristika der Exzerptheft von Marx in den Jahren 1868-1883. Internationale Wissenschaftliche Konferenz Marx mit der MEGA neu lesen. Berliner Verein zur Förderung der MEGA-Edition e.V. Berlin, 2009年11月28日
- (3) 平子友長, 「MEGA第IV部門が切り開くマルクス研究の新しい諸課題」, 社会思想史学会研究大会, 「マルクス主義の展開」セッション, 神戸大学国際人文学部, 2009年11月1日
- (4) 大谷禎之介, 「『資本論』第2部の草稿について—MEGA第2部門第11巻収録草稿を中心に—」, 独占研究会, 東京経済大学, 2009年5月23日
- (5) 竹永 進, 《Editorial work of MEGA® in Japan》, 13<sup>th</sup> Annual Conference of the European Society for the History of Economic Thought, University of Macedonia, 2009年4月25日
- (6) 竹永 進, 《Making of Capital by Marx during the period from Feb. 1864 to Sep. 1868, in relation to the editing work of MEGA, IV/18》, 国際シンポジウム『マルクスの遺産』, 神奈川大学, 2008年12月5日
- (7) 大谷禎之介, Die Spuren harter Kämpfe von Marx um die Fertigstellung des II. Buches des „Kapitals“—Zur Publikation von MEGA-Band II/11—, 国際シンポジウム『マルクスの遺産』, 神奈川大学, 2008年12月5日
- (8) 平子友長, Marx on Capitalist Civilization, 国際シンポジウム『マルクスの遺産』, 神奈川大学, 2008年12月5日
- (9) 赤間道夫, Triangle Intellectual Connection: Classical and Marxian economics in China, Korea and Japan, 国際

シンポジウム『マルクスの遺産』, 神奈川大学,  
2008年12月5日

(10) 出雲雅志, Buller, Ricardo and Marx. 国  
際シンポジウム『マルクスの遺産』, 神奈川大  
学, 2008年12月5日

(11) 平子友長, Philosophy and Praxis in  
Marx. In: Congrès Marx International V,  
Université de Paris-X Nanterre- Sorbonne,  
2007年10月3日

(12) 大谷禎之介, Labouring Individuals and  
Association. In: Intervention de la  
section études marxistes de Congrès Marx  
international V, Université de Paris-X  
Nanterre - Sorbonne, 2007年10月3日

〔図書〕(計 12件)

(1) 大谷禎之介訳, ヨハン・モスト原著, カー  
ル・マルクス改訂・加筆『マルクス自身の手  
による資本論入門』, 大月書店, 2009年, pp.  
216

(2) 大谷禎之介, Ljudmila Vasina und Carl-  
Erich Vollgraf (hrsg), Marx- Engels-  
Gesamtausgabe (MEGA<sup>®</sup>) II/11. Karl Marx:  
Manuskripte zum zweiten Buch des  
„Kapitals“ 1868 bis 1881. Akademie Verlag  
Berlin, 2008. pp. 1850

(3) 窪 俊一, ロルフ・ヘッカー, Grüß Gott!  
Da bin ich wieder!—Karl Marx in der  
Karikatur, Eulenspiegel Verlag, Berlin.  
2008年, pp. 224

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

平子 友長 (TAIRAKO TOMONAGA)  
一橋大学・大学院社会学研究科・教授  
研究者番号: 50126364

### (2) 研究分担者 (15名)

赤間 道夫 (AKAMA MICHIO)  
愛媛大学・法文学部・教授  
研究者番号: 30175781  
浅川 雅巳 (ASAKAWA MASAMI)  
札幌学院大学・経済学部・准教授  
研究者番号: 80364214  
天野 光則 (AMANO MITSUNORI)  
千葉商科大学・商経学部・教授  
研究者番号: 20049943  
(H20: 連携研究者)  
出雲 雅志 (IZUMO MASASHI)  
神奈川大学・経済学部・教授  
研究者番号: 20268709  
(H20: 連携研究者)  
伊藤 武 (ITO TAKESHI)  
大阪経済大学・名誉教授  
研究者番号: 40066816  
(H20→H21: 連携研究者)

内田 博 (UCHIDA HIROSHI)  
藤女子大学・人間生活学部・教授  
研究者番号: 20168701

大谷 禎之介 (OTANI TEINOSUKE)  
法政大学・名誉教授

研究者番号: 70061132  
(H20→H21: 連携研究者)

小黑 正夫 (OGURO MASAO)  
旭川大学・名誉教授

研究者番号: 10076359  
(H20→H21: 連携研究者)

神山 義治 (KAMIYAMA YOSHIHARU)  
北海学園大学・経済学部・教授

研究者番号: 60305886

窪 俊一 (KUBO SHUNICHI)  
東北大学・大学院情報科学研究科・准教授

研究者番号: 50161659

高畑 明尚 (TAKAHATA AKIHISA)  
琉球大学・法文学部・准教授

研究者番号: 70274876

竹永 進 (TAKENAGA SUSUMU)  
大東文化大学・経済学部・教授

研究者番号: 00119538

(H20: 連携研究者)

鳥居 伸好 (TORII NOBUYOSHI)  
中央大学・経済学部・教授

研究者番号: 70217587

(H20: 連携研究者)

森下 宏美 (MORISHITA HIROMI)  
北海学園大学・経済学部・教授

研究者番号: 90191022

吉田 傑俊 (YOSHIDA MASATOSHI)  
法政大学・名誉教授

研究者番号: 00041179

(H20→H21: 連携研究者)

### 海外研究協力者 (8名)

Prof. Dr. Anneliese Griese (Werkvertrags-  
mitarbeiter der Berlin-

Brandenburgischen Akademie der  
Wissenschaften 下線部以下 BBAW と略記)

Prof. Dr. Rolf Hecker (Werk- v  
ertragsmitarbeiter der BBAW)

Dr. Jürgen Herres (Mitarbeiter der  
Berlin- Branden- burgischen Akademie der  
Wissenschaften der BBAW)

Prof. Dr. Manfred Neuhaus (Sekretär der  
Internationalen Marx- Engels- Stiftung,  
Leiter der MEGA- Arbeitsstelle an der  
BBAW)

Dr. Jürgen Rojahn (Werk-  
vertragsmitarbeiter der BBAW)

Dr. Regina Roth (Mitarbeiterin der BBAW)

Dr. Richard Sperl

(Werkvertragsmitarbeiter der BBAW)

Prof. Dr. Ljudmila Vasina (Mitarbeiterin  
des Russländischen Archivs für Sozial-  
und Politikgeschichte in Moskau)